

接続詞「しかし」における「逆接」の認識について

——明治下半期から昭和戦前の様相——

梅林 博人

一 はじめに

従来、接続詞「しかし」において逆接性の認識が深まるのは、近代（明治）以降とされている。が、その様相については、必ずしもはっきりとはしていない。

そこで本稿では、文典、辞典、用例などによってその認識の深まりの様相を考察し、以下の内容を述べる。

○文典に見られる記述から、「しかし」の逆接性の認識は、明治末期にはある程度深まっていたと目される。そして、その認識は、大正、昭和戦前の時期においてさらに深まっていったと考えられる。

○明治下半期の辞典においては、「しかし」の記述に大きな変化は見られない。したがって、当時の辞典の記述は、その時期に使用率が伸張した「しかし」の

語義や語法を十分に反映していたとは考えにくい。

○戦後、「しかし」は逆接用法を中心として考察される時期を迎える。このことから、「しかし」の逆接性の認識の深まりは、明治末期から昭和戦前までの比較的短い期間で進行したと推察される。

二 問題点の整理

接続詞「しかし」は、近世までは「ソレニシテモ……」ソレハソウトシテ……に近い気分を表し、論理的な逆接条件を表すというよりは、前述の事柄に別のあらたな事柄を付加する、または意見をさしはさむといった軽い条件しか構成しない（森田（一九六八）四章）語であったが、近代（明治）になって逆接性を具備する

ようになるとされている。森田（一九八〇）はその点を次のように述べる。

明治以降、「しかし」が逆接の接続助詞「／＼けれども」などと一緒に用いられるようになる。二葉亭四迷の作品にも、

「それは課長の方が、或は不条理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向つて、抵抗を試みるなどといふなア、馬鹿の骨頂だ」（『浮雲』）「私の為を思つていふのは解つてゐるけれど、しかし私は如何しても矢張東京へ出て何処かの学校へ入りたい」（『平凡』）

と例がすでに見えている。今日では、このような逆接の接続助詞と併用するのは当り前となったが、併用することによってかなり論理的な意味関係が生み出され、＼それにもかかわらず＼と言い換えのきく条件接続となる。「しかし」がこのような論理性を具備するに至ったのは、おそらく明治以降特に盛んになった翻訳文による西欧語接続詞の影響によるものであろう。現代のように、文体の別なく会話にも文章にも「しかし」が愛用されるようになったの

は、さらに時代がくだってからと思われる。（森田（一九八〇）一九〇頁。傍線引用者）

傍線部については、木坂（一九七六）、森岡（一九九九）などの詳細な研究があり、首肯されるところである。が、万人が翻訳に関わるわけではないことを考えると、翻訳によって得られた「しかし」に関する知識が、いつ、どのように広まったのかという、いわば知識の普及の実態（媒体、方法、時期などがどのようなであったのか）については探究の余地があると考えられる。

たとえば、森田（一九六八）は、知識の普及の時期について「その時期はおおよそ明治下半期と推定されるが、個人により文体によりかなりのずれと幅とを認めなければならぬ」（五章）と指摘しているが、その「時期」についてもさらに追究が必要であるように思われる。

そこで、本稿では、辞書、文典、実例などによって、「しかし」の逆接性に関する知識の普及の実態について考察を行う。

三 文典の記述

三―一 記述内容による文典の分類

今回は、森田（一九六八）の「おおよそ明治下半期」という指摘を参考に、明治下半期以降の文典を確認し、文典を、その記述内容によって次のように分類した（北原保雄・古田東朔編『日本語文法研究書大成』勉誠出版、などを利用した）。

○「しかし」の逆接性を例文によって暗示する文典

明治三四年『日本俗語文典』（松下大三郎）

明治四〇年『漢譯日本口語文典全』（松下大三郎）

○「しかし」の逆接性を例文と解説とによって暗示する文典

明治三四年『日本俗語文典 全』（金井保三）

明治四一年『高等日本文法』（三矢重松）

明治四四年『日本口語法』（保科孝一）

昭和一〇年『新文典別記 上級用』（橋本進吉）

○「しかし」の逆接性を解説によって明示する文典

明治四五年『文語口語対照語法』（吉岡郷甫）

昭和一一年『國語法査説』（徳田浄）

○「しかし」の逆接性を例文と例文に近接させた解説

とによって明示する文典

大正一三年『尋常小学國語讀本を資材とした日本口語法』（鶴田常吉）

昭和一九年『日本語―共榮圈標準口語法―』（藤原與一）

本章以下では、まずこの順に、各文典の例文や解説の内容を見る。その後、文典を発刊年次順に並べかえて表1としてまとめ、「しかし」の逆接性の暗示、明示の変化を概観したい（解説部分の引用に際しては旧漢字を改めた）。

三―二 「しかし」の逆接性を例文によって暗示する文典

三―二―一 明治三四年『日本俗語文典』（松下大三郎）

「接続詞ハ二個以上の言葉を同資格に接続する詞なり。」（第一編第一章「第七項 接続詞」三六頁）とし、「ソウシテ」（二例）、「シカシ」（一例）の例文を載せる。

花は咲いた。シカシ間もなく散った。

三―二―二 明治四〇年『漢譯日本口語文典 全』

（松下大三郎）

「接続詞ハ詞ト詞ノ関係ヲ表ハスモノデス。」(第一章「第六節 接続詞」一八頁)とし、「其レカラ」「其レトモ」「其レダカラ」「併シ」「其レダノニ」の例文とその漢訳(各接続詞について二例ずつ)を載せる(同文典は縦書き二段組み。中央に線を引き、上段に日本語の例文を載せ、下段にその漢訳を載せる。ここでは日本語の例文と漢訳を並記する。「併し」を挟んでの左傍線の付け方が例文の一つ目と二つ目では異なっているが、傍線の有無は原文のママ)。

アノ人ハ話ハ大変上手デス。併シ文章ハ書ケマセン。
彼最善談話。然不能作文章。

学生ノ中ニハ雨降ニハ学校ヲ休ム人が有リマス。併シ私ハマダ一日モ欠席シマセン。

学生内有雨天不上学堂者。然我未嘗一日告暇。

三―三 「しかし」の逆接性を例文と解説とによって暗示する文典

三―三―一 明治三四年『日本俗語文典 全』(金井保三) 接続詞を「一、対等の言葉、又は、はなしを累加する

ために用ゐるもの。」「二、意味のちがふはなしをつなぐもの。」「三、前の意味から引つゞいて起る意味或は結果をむすび合せるもの」に分類し(第二編「第九章 接続詞」一二一―一二五頁。該当頁には「第七章 接続詞」と誤記)、「二」の例文として、「それでも」「しかし」「とはいふものの」「た、し」「もっとも」「ところが」の例文(各一例)を載せる。

よくなまけます。しかしわすれませぬ。

「ちがふはなしをつなぐ」という解説が逆接性を指摘しているようにも見えるが、しかし、この解説は、たとえば「企画は順調です。しかし、お茶はまだかな」(『明鏡国語辞典』第二版 大修館書店 二〇一〇年)などのいわゆる転換の「しかし」にも当てはまる解説であるようにも考えられることから、この文典だけでは、「しかし」の逆接性を明示しているとはいひ切れないと考えられる。

三―三―二 明治四一年『高等日本文法』(三矢重松) 「接続詞は語・句・文を接続する者にして、同類を並

ぶるあり、添加するあり、改説するあり、順説するあり、逆説するあり。」(第二篇「第十章 接続詞」三四四頁)とし、「句・文のみ」を接続するものとして、「但(尤)」「旁」「将又」「尋いで」「故に(されば、就いて、依って、随って、さてこそ)」「されど(しかし、而も、さりとて)」「かつ(しかのみならず、併せて、然して)」の例文(各一例)を載せる。

私は貧なりされど(しかし、而も、さりとて) 糊口に支へず

「逆説するあり」という解説および類語と併用しての例文などから、一見すると逆接性が明示されているようにも見えるが、例文と解説が近接していないことに加えて、「改説するあり」などの紛らわしい解説もあることから、この文典だけでは「しかし」の逆接性を明示しているとは言い切れないと考えられる。

三―三―三 明治四四年『日本口語法』(保科孝二)

「語句あるいわ文を結び付ける語を接続詞という。」(第二編「第七章 接続詞」一六八頁)とし、「意義の方

から見ると、原因結果の関係を有する事柄を接続するものもあり、全く相背反する事柄を接続するものもある。又、単に上の事柄を受けて下の事柄を接続するものもある。」と述べる(同一六九頁)。それに続けて「又」「又ワ」「或ワ」「且ツ」「其上」「及ビ」「猶」「猶又」「然シナガラ」「然シ」「シカルニ」「ノミナラズ」「ケレドモ」「ダカラ」「ソレデスカラ」「ソコデ」「スルト」「ソレカラ」「トコロガ」「ソシテ」「ソレデ」「ソレナラ」「ツイテワ」「ソレデワ」「トコロエ」の例文を各一例ずつ(「ソレデハ」のみ二例)載せる。

コレモ職分ノ一ニワ相違ナイガ、然シ、ソノ職分タルヤ文法上ヨリワムシロ：

「相背反する事柄を接続する」という解説、類語の例文との並置などから、逆接性が明示されているようにも見えるが、これも例文と解説が近接していないため、この文典だけでは「しかし」の逆接性を明示しているとは言い切れないと考えられる。

(橋本進吉)

「接続詞は、前後を結び着けるのに用ひる語であります。」(第一篇「第一章」【一二】接続詞「三〇頁」とし、「またこれを意味の上から分類すれば、大体付け加はる意を表はすもの(「及び」「かつ」「また」の類)、一つを扒取る意を表はすもの(「又は」「或は」「それとも」の類)、当然の結果として起る事を表はすもの(「随つて」「それだから」「さうすると」の類)、当然予想し得べき結果に反した事や、前に述べた事に反する事を導くもの(「然るに」「けれども」「但し」「尤も」の類)の四種類になります。」と分類する(三〇―三二頁)。各接続詞の例文は同書に散在するが、「しかし」については次のものが載っている。

私も寝たいが、しかしまだ用がある。(第二篇「第

九章 独立語「一六二頁」)

「本書の『山は低いが、しかし……』『士に争友あれば則ち……』は、」(第四篇「第十八章 接続詞・感動詞の用法」三〇七頁)

僕も行つて見たいけれども、しかし父が許してくれ

ない。(第四篇「第十八章 接続詞・感動詞の用法」三〇七頁)

「当然予想し得べき結果に反した事や、前に述べた事に反する事を導く」という解説から逆接性が明示されているようにも見えるが、これも用例と解説が近接していないため、この文典だけでは「しかし」の逆接性を明示しているとは言い切れないと考えられる。

三―四 「しかし」の逆接性を解説によって明示する文典
三―四 ― 明治四五年『文語口語対照語法』(吉岡郷甫)

「語・連語・節又は文を接続する準体言を接、続詞と云ひます。」(第九章 接続詞「一五二頁。傍点は白ごま点」とする。そして、「接続詞は其の職能に依つて之を四種に分ちます」(同頁)として、「(一) 第一種は物事を累加するもの……(挙げられている該当の接続詞は割愛―引用者)」「(二) 第二種は物事を選択するもの……(挙げられている該当の接続詞は割愛―引用者)」「(三) 第三種は上の事情とその事情から起つた当然の結果とを接続するもの……(挙げられている該当の接続詞は割愛―引用者)」と記し、続けて、次のように記す。

(四) 第四種は上の事情と其の事情から起る反対の事情とを接続するものでありまして、「しかれども・されど」「しかるに・さるに」「さりながら」「しかながら」「しかし」「たゞし」「それだけれども・だけれども」「それですけれども・ですけれども」「[△]それが・だが」「[△]それですが・ですが」「[△]それなのに・だのに」「[△]それですのに・ですのに」「[△]それでも・でも」「[△]それに」「[△]それのに」「[△]もつとも」「[△]ところが」等は之に属するのであります。(一五四頁)

「しかし」が「之に属する」と明示されている。なお、この後に、「然るに」「但し」「だが」「尤も」の例文が載るが、「しかし」の例文は記載されていない。

三―四―二 昭和二年『國語法査説』(徳田浄)

「接続詞が二つ以上の対立せる語、句、文の間に位置して現はす職能は接続、対立発示の二作用である」(第五章「第八節 接続詞」一六三頁)とする。そして、「接続詞を意味上から分類して次の如くに示されて来た。」(一六四頁)として以下を示しているが、その記述から「しかし」が「逆説の接続詞」として扱われていること

が端的に分かる。

- | | | | |
|-----|---------|------|------|
| (1) | 同格の接続詞。 | | |
| | 及び | 並びに | |
| (2) | 累加の接続詞。 | | |
| | 又 | 次に | ついで |
| | なほ | 且つ | 加之 |
| (3) | 選択の接続詞。 | | |
| | はた | 若しくは | 或は |
| | | | 就中 |
| (4) | 順説の接続詞。 | | |
| | 故に | 従つて | 因つて |
| | では | すると | だから |
| (5) | 逆説の接続詞。 | | |
| | 併し | 但し | 尤も |
| | だが | だのに | でも |
| | | | けれども |
- (4)(5)を因果の接続詞、係続の接続詞、条件の接続詞と呼ぶ人もあり、また(1)(2)(3)を並列の接続詞といふ人もある。(一六四頁)

なお、この説明の直後から、「次に接続の職能上から分類する説がある。湯澤幸吉郎氏の「口語法精説」に見

えるものでは、」と引用を始めるが、その中に「兄は辛抱強いが、しかし弟はそんなでない。」と、湯澤氏の例文を借用する形で、「しかし」の例文を示している。

三一五 「しかし」の逆接性を例文と例文に近接させた

解説とによって明示する文典

三一五——大正一三年『尋常小学國語讀本を資材とし

た日本口語法』（鶴田常吉）

「接続詞は上の語を受けて下の語を装定する副用言である。」（第十五章 接続詞「一三一頁」とする。そして、「接続詞は装定の関係によって左の四つに分ける。」として、「並列の接続詞」（「その上」「又」「さうして」「で」の例文は割愛—引用者）、「選択の接続詞」（「中で」「中には」の例文は割愛—引用者）、「反意の接続詞」（以下に引用）、「順意の接続詞」（「すると」「それでは」「それなら」（二例）の例文は割愛—引用者）を記す。

○反意の接続詞

けれども貧しい木こりごやで……（七、八六）

ところが長盛はろく／＼あいさつもせず

（七、九八）

親も喜んだ。……しかも一番喜んだのは……

（二二、五八）

しかしだん／＼落着いて見ると……

（二二、五三）

「反意」という解説で「しかし」の逆接性が示されていると考えられるが、ただ、その一方で、例文に「しかも」が並置されている点が多少懸念される。

三一五——昭和一九年『日本語—共榮圈標準口語法—』

（藤原與二）

本書は「その副題が示す様に、満州国人、中華民国人、を初として、大東亜共榮圈の人々が学ぶべき標準口語法を説いた教科書である。」（二頁）。

索引を見ると、「逆説の接続詞」として「然し」「けれども」「けれども」「だけど」「だが」「でも」「尤も」「ところが」「順説の接続詞」として「さうして」「そして」「だから」「ですから」「そこで」「すると」「それから」「又・及び」の二語」とある。

ここでは、「然し」「けれども（けれど）」の解説を見たい。

○空気や水は、非常に大切だ。然し、人は一その有難味を殆ど感じてゐない。

前文に対して逆説的に後文を表現しようと思へば、「然し」といふ語を冒頭に置く。

此は、後文と前文との接続関係を示すものであつて、**接続詞**と呼ばれるが、文初に遊離独立してゐる点では、此も亦独立部と見られる。

○空気や水は、言ふまでもなく非常に大切です。けれども(けれど)、人は一その有難味を殆ど感じません。

の「けれども」(けれど)も、「然し」と同種の語である。が、「然し」よりもこの方が感じが柔かであり、一層口語的な表現になる。女子は「然し」を殆ど使はない。(第六章 独立部 一八九頁)

「しかし」の逆接性の指摘のほか、「柔か」「女子は……殆ど使はない」などの情報も貴重である。

三一六 この章のまとめ

以上で見た文典を発刊年次順に配列し、「しかし」の逆接性を、「例文によって暗示する文典」には△、「例文

と解説とによって暗示する文典」には○、「解説によって明示する文典」には◎、「例文と例文に近接させた解説とによって明示する文典」には◎の符号を与えて、次の表1にまとめる(次頁)。

表1から、「しかし」の逆接性についての認識は、明治末期にはある程度深まっていると考えられ、森田(一九六八)の「おおよそ明治下半期」という指摘も妥当と考えられる。

そして、大正、昭和戦前の時期においては、そうした逆接性の認識がさらに深まっていったと考えられる。したがって、先に『新文典 別記 上級用』(昭和一〇年 橋本進吉)の逆接性の示唆を「暗示(表1で○印)」としたが、逆接の認識自体が確立されているという状況を考えると、同文典のように例文と解説が近接していなくても、典型的な文脈があれば、十分に逆接性の示唆を読み取ることができたと考えられる。

なお、今回、「しかし」について「逆接」の漢字表記は見られなかったが、『高等日本文法』(明治四一年 三矢重松)に次のような記述がある。

表1 文典における「しかし」の記述の概略

文典	用例	逆接性	備考（解説用語など）
明三四『日本俗語文典』松下大三郎	有	△	
明三四『日本俗語文典 全』金井保三	有	○	ちがふはなしをつなぐ
明四〇『漢訳日本口語文典 全』松下大三郎	有	△	
明四一『高等日本文法』三矢重松	有	○	逆説する
明四四『日本口語法』保科孝一	有	○	相背反する事柄を接続
明四五『文語口語対照語法』吉岡郷甫	無	◎	反対の事情と接続
大一一『尋常小学国語讀本を資材とした日本口語法』鶴田常吉	有	◎	反意の接続
昭一〇『新文典別記上級用』橋本進吉	有	○	前に述べた事に反する事を導く
昭一一『國語法査説』徳田浄	(有)	◎	逆説の接続詞
昭一九『日本語―共榮圈標準口語法―』藤原與一	有	◎	逆説的。逆説の接続詞（索引）

【表1の補足】

*用例欄の「(有)」は湯澤氏の用例が引用されていることを示す。

さて連用法は平坦に接続し平坦に説明するものなれば、『平接す』『平説す』といふを得べし。前提法に於ける「順態」「逆態」といふも接続態の順、或は逆なるよりの名にて、順接逆接といひて平接と相比すべし。(第五章 動詞 九五頁。傍線引用者)

接続について「逆接」の表記が有り得たことがわかるうえに、『平接す』『平説す』からは「接」と「説」とが相通じていたことも分かる。表1を見ると、明治の半ばでは、「逆説」という表現もされていないことを考えると、まず「逆説」が行われ、その後「逆説↓逆接」が起こったようにも感じるが、これについては推測の域を出ないことから、これ以上は控えて今後の課題としたい。

四 辞典の記述

今回、『和英語林集成第三版』および『明治期国語辞書大系』(二六巻。飛田良文・松井栄一・境田稔信編。大空社)を調査し、「しかし」を立項する辞典の記述を表2としてまとめた(88頁)。ここでは、それによって、

明治下半期の辞典の記述内容を概観する。なお、次の三冊の辞典については用例も記載されていたので、ここにあげておく。

・明二五年『日本大辞書』(山田美妙)

「谷峨、二筋道『しかし風ヲ引カウゼ』」

(梅暮里谷峨(一七九八<寛政一〇>)『傾城買二筋道』。洒落本)

・明二七年『日本大辞林』(物集高見)

「撰集抄 一(冥途のあしき道にハ、戒絶、不放逸のみこそ、身をバたすくなれ。しかし、はやく、恩愛をふりすてて、戒絶の功德をたくはへんと思ひ侍れど」

(『撰集抄』仏教説話、鎌倉時代、著者成立年未詳)

・明二九年『帝国大辞典』(藤井乙男・草野清民)

「谷峨、傾城買二筋道『しかし風を引かうぜ』」

表2を見ると、明治下半期においては、辞典の記述に大きな変化があるようには思われない。すなわち、各辞典は「しかしながら」の略言であることを記しており、文語の類語を提示した『日本辞書言海』(明治二二年)

や『日本大辞書』（明治二五年）とほぼ同様の記述が明治末期まで続いていると見る事ができよう。

先に見た文典には、「逆説」「相背反」「反対」「反意」といった逆接性を示唆する語が登場してきていたことや、口語接続詞の語例や文例が少なからず記されていたことを考えると、辞典の記述は旧態依然であることは否めない。

こうしたことから、明治下半期の辞典の記述は、同時に使用が飛躍的に伸びたとされている「⁽¹⁾しかし」の語義・語法を反映していたとは考えにくい。そこから、同時期の辞典は、当時の「しかし」を知るためにはあまり有用ではなかったのではないかと思われるのである。⁽²⁾

五 逆接性の認識の深まりの早さ

現行の『日本国語大辞典 第二版』（小学館）は、どの時代の「しかし」であっても、「先行の事柄に対し、後行の事柄が反対対立の関係にあることを示す（逆接）」用法として処理をしている。すなわち、次にあげる『浮雲』の、「ソレニシテモ……ッソレハソウトシテ……」に近い気分を表し」（森田（一九六八））ていると考えら

れるような「しかし」についても、そのような意味には解釈をしていないということになる。

①文三の決心を聞いてお政は漸く眉を開いて切りに点頭き「さうともネ／＼幾程母親さんの機に入ッたからッて肝腎のお前さんの機にいらなきやア不熟の基だ しかしよくお話だッた 実はお前さんのお嫁の事に就いちやア（後略）（『浮雲』第一篇第三回。『新日本古典文学大系』（岩波書店）二三四—二三五頁）

そうした解釈の是非はさておき、現在では、それほどまでに逆接用法を中心に据えて考える傾向にあるわけであるが、そのような風潮は、戦前までの段階でかなり逆接性の認識が深まったことの証でもあるかと考えられる。

だとすると、明治下半期からと目される「しかし」の逆接性の認識の深まりは、かなり早く進行したのではないかと推察されるのである。

表2 明治期の辞典における「しかし」の記述内容

「しかし」を立項する辞典		品詞	語釈	用例
明一九『和英語林集成第三版』J.C. くボン	×		But, still, however, yet, nevertheless, notwithstanding, = tadashi	
(一) 普通辞書 (一八冊)				
明二一『漢英対照いろは辞典』高橋吾郎	副		併、然、されど But, nevertheless, however	
明二一『ことばのはやし』物集高見	ソ		さりながら。さはいへど。	
明二一『和漢雅俗いろは辞典』高橋吾郎	副		併、然、されど	
明二二『日本辞書言海』大槻文彦	接		しかしながらノ略	(補注①)
明二五『日本大辞書』山田美妙	接		しかしながらノ略	(補注②) ○
明二五『増訂二版和漢雅俗いろは辞典』高橋吾郎	副		併、然、されど	
明二七『日本大辞林』物集高見	ツナギ		併。さりながら。さはいへど。さはいふものの。	○
明二八『日本新辞書』三田村熊之介	接		しかしながらノ略	(補注③)
明二九『帝国大辞典』藤井乙男・草野清民	接		しかしながらの略言なり	(補注④) ○
明三〇『日本新辞林』林甕臣・棚橋一郎	接		しかしながらの略言、(然)	(補注⑤)
明三一『ことばの泉』落合直文	接		併。しかしながらの畧。	(補注⑥)
明三一『帝国以呂波節用大全』山田美妙	副		シカシ併	
明三八『国語漢文新辞典』井上頼圀	接		併。しかしながらの畧。	(補注⑦)
明四〇『辞林』金澤庄三郎	接		「しかしながら」の略言。(然)	(補注⑧)
明四一『発音数引実用新辞典』森本樵作	接		シカシナガラの略	(補注⑨)
明四二『俗語辞海』松平円次郎・山崎弓東・堀篁美善	接		しかしながら(乍然)の略。	(補注⑩) △
明四四『辞林四十四年版』金澤庄三郎	接		「しかしながら」の略言。(然)	(補注⑪)
明四五『大辞典』山田美妙	接		しかしながらノ畧。	(補注⑫)
(二) 雅俗・俗雅辞書 (二冊)				
明三五『国語辞典』林幸行・南条文雄	×		しかしながらの略」サレドモ・さすがトモ云(併) (補注⑬)	

【表2の補足】

* 「普通辞書」「雅俗・俗雅辞書」の類別は調査した『明治期国語辞書大系』による。品詞欄の「ソ」は「副詞（そえことば）」、「×」は無記。用例欄の△は「しかしながら」の例文。

* 『和英語林集成第三版』の「タダシ」に次の記述があり参考となる。「TADASHI タヅシ but conj. Used in introducing some exceptional or explanatory remark, or a note to something stated before; but, however, or」

* 補注①～⑬は以下のとおり。

補注① 「しかしながら」の項の記述→然リトイヘドモ、サレドモ。サリナガラ。略シテ、シカシ。雖然

補注② 「しかしながら」の項の記述→デアルケレドモ。サレドモ。サリナガラ。ガ。シカリトイエドモ。シカシ。

補注③ 「しかしながら」の項の記述→サウデアルモノ、。ソノヤウデハアレド。古クハさながらノ意味に用い井タリ。

補注④ 「しかしながら」の項の記述→されども、さりながらなどの意に用ゐることとなり。

補注⑤ 「しかしながら」の項の記述→されども、さりながら

補注⑥ 「しかしながら」の項の記述→さりながら。さはいへど。されど。

補注⑦ 「しかしながら」の項の記述→さりながら。さはいへど。

補注⑧ 「しかしながら」の項の記述→されども。さりながら。（雖然）。

補注⑨ 「しかしながら」の項の記述→さりながら。さはいへど。

補注⑩ 「しかしながら」の項の記述→さりながら。さういふけれど。

補注⑪ 「しかしながら」の項の記述→されども。さりながら。（雖然）。

補注⑫ 「しかしながら」の項の記述→サリナガラ。サレド。タツシ。サハイへ。ガ。

補注⑬ 「しかしながら」の項の記述→しハ助辞ニテ△しかながら也」サナガラ」轉ジテ△しかりといへども▲しかしが△さりながら△されども」略シテ△しかしトモ云（乍併）

六 おわりに

本稿では、文典、辞典、用例などによって、接続詞「しかし」における、逆接性の認識の深まりの様相について考察し、冒頭にまとめたような内容を述べた。

ただ、今回は、限られた資料によっておよその目処をつけたにすぎず、資料の量も必ずしも十分なものではない。今後も調査を重ねて、記述の精度を高めていきたいと考える。

【注】

- (1) 馬場俊臣(二〇〇五)が、一九〇九(明治四二年)以降、出現率が伸びていることを報告している。

- (2) なお、今回調査した『明治期国語辞書大系』内の辞典で、「しかし」を立項していない辞典は次の通りである。普通辞書三冊(明四『語彙』、明三九『国漢文辞典』、明四一『大增訂ことばの泉補遺』)。雅俗・俗雅辞書二四冊(明一一『日本小

辞典』、明一二『雅言解』、明一二『雅言小解』、明一四『雅言略解』、明一八『ことばのその』、明二一『掌中雅言栞』、明二三『雅俗俗雅 日本小辞典』、明二四『俗語雅調』、明二四『国文小辞典』、明二四『言葉の手引』、明二五『雅俗俗雅 日本小辞典』、明二五『訂正増補 国文小辞典』、明三五『国語集解』、明三五『国書辞典』)

【参考文献】

- 梅林博人(二〇一七)「滑稽本の接続詞「しかし」について」『表現研究』一〇五号 表現学会
木坂基(一九七六)『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房
京極興一・松井栄一(一九七三)「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』明治書院
金水敏(二〇〇四)「グローバル時代における日本語——客観化をめぐる——」『日語日文学研究』第49輯 韓国日語日文学会
田中章夫(一九八四)「接続詞の諸問題——その成立と機能」『研究資料日本文法 第4巻』明治書院

馬場俊臣（二〇〇五）「逆接の接続詞・接続語句」『雜誌『太陽』による確立期現代語の研究——「太陽コーパス」研究論文集——』国立国語研究所編 博文館新社

森岡健二（一九九九）『欧文訓読の研究——欧文脈の形成——』明治書院

森田良行（一九六八）「しかし——発生と展開」『ことばの宇宙』三卷一號 テック 森田良行（一九九三）に所収、後者を使用

森田良行（一九八〇）「しかし」『基礎日本語2』角川書店（森田（一九八九）に所収）

森田良行（一九八九）『基礎日本語辞典』角川書店

森田良行（一九九三）『言語活動と文章論』明治書院

山本正秀（一九六五）『近代文体発生の史的研究』岩波書店

山本正秀（一九七一）『言文一致の歴史論考』桜楓社

【文典】

北原保雄・古田東朔編『日本語文法研究書大成』（全一四冊）勉誠出版

鶴田常吉（一九二四）『尋常小学國語讀本を資材とした日本口語法』南郊社

橋本進吉（一九三五）『新文典別記上級用』富山房

藤原與一（一九四四）『日本語——共榮圈標準口語法——』目黒書店

三矢重松（一九〇八）『高等日本文法』明治書院

【辞典】

飛田良文・松井栄一・境田稔信編『明治期国語辞書大系』（全二六卷）大空社

J.C.くボン（一九四四）『和英語林集成第三版』（松村明解説、一九八〇年、講談社学術文庫）

【付記】 本稿は、JSPS科学研究費16K02751「近現代の新語・新用法及び言語規範意識の研究」の研究発表会（二〇一七年八月三一日 於京都府立大学稲森記念会館一〇五講義室）で発表した内容に加筆修正したものである。発表当日およびその後、に貴重な意見をいただいた。記してお礼申し上げます。なお、本研究はJSPS科学研究費16K02751の助成を受けたものである。

（本学教授）